

会長就任に当って

小笠原 暁



この度、会員各位のご推挙により2002年度、2003年度の会長の重責を担うことになりました。時あたかも我が国の各界において改革が叫ばれております。政治、経済、行政、教育等、どの分野を見ましても従来の構造、在り方に様々な不合理性、不透明性、時代の要求への不適應性が指摘され、これらを改革して行かなければ我が国の将来は暗いと思わざるを得ません。

われわれの日本オペレーションズ・リサーチ学会においても設立以来既に40数年の歳月が経過し、いろいろな改革が求められているのではないのでしょうか。私が一番危惧しているのはORの社会における存在価値が低下しつつあるのではないかということです。このことは歴代理事会の必死の努力にもかかわらず、我が国経済の低迷あるいは新しい関連学会の設立と相まって、賛助会員数、産業界に在籍の個人会員数が減少しつつあることに如実に現れているのではないのでしょうか。

ORは成立の過程では軍事上の作戦研究として利用され、それなりの成果をあげ、戦後のベルリン空輸に当っては線形計画法が登場し、さらには企業の在庫管理や生産計画、スケジュール管理、待ち行列解消などのための様々な手法が開発され、実用化されていったことは会員諸氏の良くしるところであります。あの頃のORの元気が今は何処に行ってしまったのでしょうか。

こんなことを書くと経済学者に叱られるかもし

れませんが、現在我が国で起っているデフレの解決策に経済学が寄与している兆しはほとんど認められません。私は経済学(Economics)は再びPolitical Economyに立ち返るべきだと思っています。わがOR学会に関して言えば、経済学が無力であるために「ゲームの理論」がほぼ半世紀ぶりに息を吹き返してきたと申しては過言でしょうか。「ゲームの理論」以外にもORが現実の問題解決に寄与できる分野は幾つもあると思います。かつて計量経済学(Econometrics)が華々しく登場した時代がありました。しかし計量経済学会は問題の基本である現実の経済を離れてMathematical Methods of Econometricsの研究開発に傾斜してしまったのです。OR学会でもMathematical Methods of ORの研究が学会誌の大部分を占めた時代がありました。問題解決のための数学的手法の開発も大事なことです。ORのメインテーマは現実の問題解決であることを忘れてはなりません。最近の学会誌に掲載される論文を見ていると、やっとORも暗いトンネルを抜け出しつつあるように感じられます。

私は会員諸氏が現代社会の直面している様々な問題に対してインパクトのある解決をもたらすような研究に果敢に挑戦されることを望んでやみません。その成果があがれば、産業界も行政もORに対する認識を新たにし、ORルネッサンスが現実のものになると信じます。